京都支部

2012 年度支部活動報告

1. ＜2012. 04. 14　総会講演要旨＞
2. ＜2012. 06. 16　第１回例会講演要旨＞
3. ＜2012. 10. 20　第２回例会講演要旨＞
4. ＜2012. 11. 15　第３回例会報告＞
5. ＜2013. 01. 26　京都支部新年会＞
6. ＜2013. 03. 02　第４回例会報告＞

1.　２０１２年度支部総会報告

２０１２年度の京都支部総会は、４月１４日ウィングス京都にて、出席者２４名（委任状１３名）をもって成立し、開催されました。４月１４日現在の会員数は４５名。

２０１１年度事業報告、２０１１年度会計報告、２０１２年度事業計画案、２０１２年度会計予算案が提案され、承認されました。特筆すべきことは、２０１２年度から、大学女性協会が一般社団法人に移行するため、それに伴って京都支部として、改めて作成された「支部規約」「支部長･副支部長推薦委員会にかんする細則」が提案され、承認されたことです。また、一般社団法人への移行に伴って、会計がゼロから新しく出発することになり、そのためにとられた方法が報告され、承認されました。

また、昨年度の活動をまとめた冊子『京都支部の紹介と２０１１年度活動報告』が発行されましたので、それを出席者にお渡しし、欠席者には郵送しました。残った冊数は、全国の各支部に配布するほか会のＰＲ用に適宜使っていくことになります。

午後は、国連女性の地位委員会にご出席になった廣田輝子会員の「『国連女性の地位委員会』に出席して」と題する講演を拝聴しました。

そのあとミニバザーが開かれ、その収益金４７，８００円は大学女性協会の国内奨学生に応募された学生・院生（京都支部管内）に図書券をお送りすることになります。

総会講演要旨　　CSW56参加報告

JAUW京都支部 廣田輝子　　2012年4月14日

今年の国連女性の地位委員会（CSW56）は2月27日から3月9日までニューヨーク国連本部で開催された。 国連により諮問的地位を与えられているNGOには派遣できる人数の枠が割り当てられている。その資格を有する日本の国際婦人年連絡会に所属するJAUWから4名（1名はIFUW枠）が派遣されることになった。その１人としてCSW56に参加した。 CSW56に参加することは並行して国連本部周辺で開催されるNGO/CSW/NYのフォーラムに参加することでもあった。

NGO/CSW/NYとはニューヨークに拠点をおくNGOであり、ジュネーブとウイーンで活動するシスターNGOと呼ぶ２つのNGOと協力関係にある。このニューヨークのNGOは国連によって特別協議資格を与えられている８０以上のNGOを束ねていて、国際婦人年連絡会もその中の１つである。 NGO/CSW/NYのフォーラムが出版したCSW56のハンドブックはさまざまな情報が記載されていて参加者にとって必要不可欠なものであった。このフォーラムは会期中コンサルテーションデイ、リセプション、UN Women と共催の朝のブリーフィング、250以上もあったパラレルイベント、アーティザン・フェア、国際女性の日マーチ等のイベントを主催した。

CSW56会議開始前日、２月２６日に開催されたコンサルテーションデイは会議参加者にとってオリエンテーションの意味もあり、きわめて重要なイベントであった。この日の基調演説はCSW56期間中実質的な仕事に責任を持つUN Womenの局長であるミシェル・バチェレ元チリ大統領とNGO/CSWから今年度女性栄誉賞を与えられたニカラグアのミルナ・ケインさんの二人であった。２０１１年度ノーベル平和賞を受賞した３人の女性の内の１人、リベリアの平和活動家リーマ・ボウイーさんもゲストスピーカーとして挨拶した。CSW56の議長は同じリベリアのマヨン・カマラ女史であったことをここで述べておきたい。全体として中南米やアフリカの女性達の元気な姿が印象的だった。

CSW56、すなわち56回目の国連の女性の地位委員会は2月27日から始まった。日本政府代表団の１員でない限り、会議場に入るにはセカンダリーパスと呼ばれる2つ目のパスが必要となるが、JAUWの場合このパスは14名に１枚の割り当てで入手が難しいものだった。さいわいなことに2週間の滞在中、2回本会議を傍聴する機会があった。各国代表、招かれている団体やNGO、それに有識者達のステートメント等は公開されたが、実際の討議、採決は非公開で議場に入れなかった。

日本政府代表橋本ヒロ子さんの言葉を会場で聞くことはできなかったが、数日後、日本政府代表団のブリーフィングの席で配られた資料によれば、彼女はステートメントの冒頭で東日本大震災に際し各国から寄せられた暖かい支援に対して感謝の言葉を述べ、優先テーマである活力ある農山漁村の実現に向けた日本の総合的な取り組みとして３点を挙げていた。（１）農業者団体等における女性役員等の登用目標を設定すること（２）女性の地位の向上のため、地域農産物を活かした起業活動に向けた取り組みをすること（３）各所帯員が経営方針や役割分担を取り決める「家族経営協定」を普及させること。これらの3点は昨年12月、CSW56会議の準備のため訪れた京都府庁の男女共同参画課で実際に伺って来た京都府の取り組みと一致するものだった。

女性の地位委員会（CSW）は国連の経済社会理事会のもとにある委員会の１つで、政治・経済・社会・教育分野における女性の権利の促進に関する問題および女性の権利の分野で早急に勧告を必要とする問題を経済社会理事会に報告する任務がある。理事国45か国は地域割り当てで選出され、4年任期である。毎年約２週間開催されるCSWには、年毎に定められる優先テーマに関する合意結論が成果として求められている。合意結論に加えて、この委員会は女性の権利の問題に関する決議も採用できることになっている。

CSW56の優先テーマは「農山漁村女性のエンパワーメント及び貧困・飢餓撲滅・開発・今日的課題における役割」であった。残念ながらCSW56は会期中に優先テーマに関する合意結論が得られず、合意結論のない会期になってしまい委員会に求められている任務が果たせなかった。しかしながら、女性の権利の問題に関する決議の採用において、日本は初めて主提出国となって決議案を提出し７本中の１本として採択されたことは特筆すべきである。

「自然災害におけるジェンダー平等と女性のエンパワーメント」という決議案は日本の大震災の経験をふまえて、女性に配慮した災害への取り組みを促進することを目指したものである。その概要の一部は次のようなものである。防災・救援にジェンダーの視点を取り入れること、意思決定過程に女性の参画を確保すること、市民社会、女性ボランテイア等の役割を認識し、これを奨励すること等である。日本からのサイドイベントやパラレル

イベントは「災害とジェンダーに関する調査・研究」を発表したりして、情報を広め、この決議案の採択を助けた。

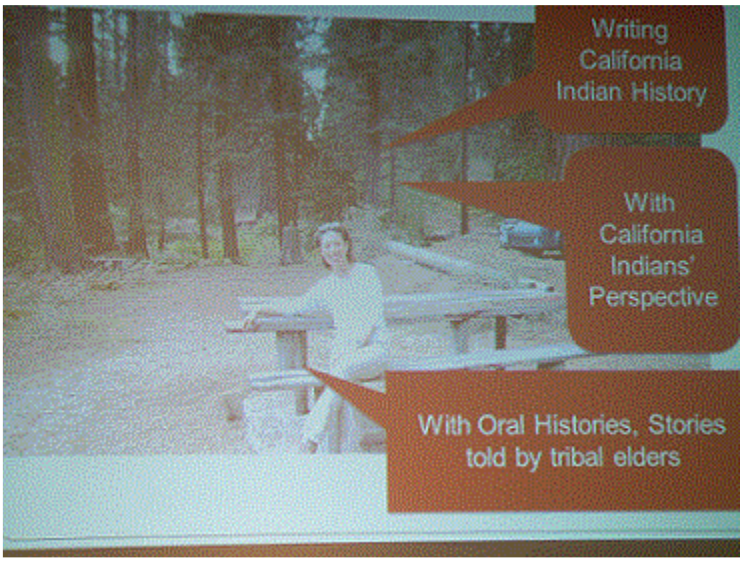
3月7日国際女性の日、午後の会議に先立ち、午前10時、国連ノース・ローンビル第四会議場はすべての座席が、各国代表ではなくグラウンドパスを持つNGOの人々で埋まった。パン・ギムン国連事務総長のスピーチとミシェル・バチェレUN Women 事務局長のビデオスピーチを聞くためだった。最後にパン国連事務総長の言葉を紹介する。「もし農村女性が生産的資源に対して平等のアクセスを得ることができれば農業生産は４％上昇し食と栄養の安全保障が強化され、1億5000万もの人々が飢えから解放される。…各国政府、市民社会、民間企業に対しジェンダーの平等と女性のエンパワーメントに全力を注ぐよう求める。」

3月8日午前11時、NGO/CSW/NY主催の国際女性の日祝賀マーチが1番街のE.42.nd. St.を出発してハマーショルド広場までにぎやかに続きました。参加者は全員マーチする理由をマジックで書いた黄色いたすきをかけて、先導するドラムやなべやふたのにぎやかな音に合わせて2番街を歩きました。You Tubeの画面でこの日歩いていた私を見ることができることを最近知りました。出会いもありました。３５年前まで住んでいたロングアイランド・ストーニイブルック近くの町から参加した人と話がはずみました。偶然その人は私達家族が滞米中、ファミリイドクターだった人の友人でした。

会議初日にも大きな出会いがありました。サンフランシスコからのグループです。最初に出席したパラレルイベントが縁で、グループの他のサイドイベントやパラレルイベントにも出席、食事を共にする仲になりました。５WCW(5th World Conference on Women)をご存知でしょうか。第５回世界女性会議です。１９９５年北京で第４回世界女性会議が開催されてから１５年が経つ３年後の２０１５年にサンフランシスコで第５回目を開催したいと運動しているグループです。すでに国連のパン事務総長は、今年７月の国連総会で第５回世界女性会議の開催を議題にすることを発表しています。場所の設定はその後になるわけですが、彼女たちの計画が実現されることを心から祈っています。

2.　第１回例会講演要旨「アメリカ合衆国の先住民：その歴史と現在」

講師：野口久美子 同志社大学アメリカ研究所助教　　2012年6月16日



「現在のアメリカ合衆国を含む南北アメリカ大陸には、西洋人がやってくる以前、文化的多様性をもつ先住民部族が居住していた。一説によれば、１５世紀当初、そこには30,000,000人が居住していたと言われている。現在の合衆国において「インディアン」もしくは「ネイティブ・アメリカン」などと呼ばれるこれら先住民人口は、１９世紀初頭までに「滅び行く人々」といわれるほど激減するに至った。加えて、今日まで、先住民の貧困、健康問題、教育問題は、アメリカの大きな社会的課題の一つとなってきた。先住民の犠牲において建国されたことは、正に、民主主義を掲げる合衆国の大きな「矛盾」として認識されるべきであろう。一方、２１世紀のアメリカ先住民社会を見渡せば、彼らが、その歴史的犠牲ゆえに、非常に特殊な政治的、経済的地位を築き上げ、天然資源、カジノ経営などによる経済効果を伴いつつ、徐々に部族コミュニティーの発展を遂げていることが分かる。先住民社会は、ローカルな経済復興から、大統領選挙などナショナルな問題に至るまで、正に合衆国の文化、社会、政治、経済に様々な影響力を持ってきていると言ってよいだろう。この講演では合衆国における先住民の歴史的経験と現在の様子について、講演者の現地調査結果などもふまえつつ紹介していきたい。」（野口久美子さんの講演レジュメから）

<u>呼称について</u>

まず呼称であるが、「ネイティブ・アメリカン（Native Americans）」という呼び方は比較的新しく、１９７０年以降のことで、彼らには違和感がある。それは、Japanese AmericansとかItalian Americansなどと呼ばれる他の移民たちと自分たちが同じように聞こえる。自分たちはもともとここに住んでいたのだから、それらの移民と一緒にしないで

ほしい、ということで、「インディアン（Indians）」（コロンブスがアメリカ大陸をインドと勘違いして、そこに住む人たちに付けた呼称）のほうがまだましだとして、自分たちをそう呼んでいる。また、ナバホ族等、それぞれの部族名で呼ぶこともある。日本では「インディアン」は差別用語ではないかと聞く学生が多いので、私はネイティブ・アメリカン、日本語ではアメリカ先住民という呼称を使っている。アメリカではアメリカ・インディアン、あるいはネイティブ・アメリカンが使われている。

「アメリカ先住民」とはどんな人たちか

アメリカ先住民であるためには、次の３つの定義がある。 ①合衆国政府が先住民部族と認定している部族から構成員と認められている人。 ②合衆国政府が規定する先住民とは、4分の１以上のインディアンの血が入っている人。 ③アメリカは10年に1度、国勢調査を行うが、その時に、何の法的根拠も、所属する部族がなくても、自らインディアンと名乗れば、インディアンと登録される。何の根拠もなくインディアンだと言う人はいないから、例えば、ひい、ひい、ひいおじいさんやおばあさんがインディアンで、自分にその血が入っていると思い、登録したい人は登録できる。

アメリカ先住民の歴史

１４９２年にコロンブスがアメリカ大陸をいわゆる“発見”する前は、今のアメリカ合衆国の土地に、５００以上の部族がひしめきあって暮らしていた。現在、ネイティブ・アメリカンの部族は５６６で、その人たちが居住している居留地（保留地）は３２２あり、その総人口は1,000,000人で、全人口の0.2%。コロンブス以前の人口は、説がいくつもあって正確な数はまだ確定されていないが、当時から現在までの間に、統計では１０分の１に減少したといわれている。現在の居留地の総面積は、アメリカ全土の0.3%。白人が来る前は国土の100%が先住民のものだったことを考えると、彼らが経験してきた迫害、侵略、略奪、虐殺、植民地化、同化政策の歴史が、いかに過酷なものだったかがよく分かる。

１７７６年、北アメリカ東部の１３の植民地がアメリカ合衆国として独立する。ヨーロッパからの移民にとって、東から西へ領土を拡大していくことは「明白な運命（Manifest Destiny）」であって、自分たちのやっていることが、キリスト教的にも、文明的にも「明白な運命」であるという理念をかかげて先住民に対して行動する。「土地を明け渡しなさい。そしてこの居留地に移りなさい。そうすれば、その代わりに合衆国政府は、その居留地（保留地）の中に住む人たちに食料を保証し、毎年保証金を出し、かつその領土内に今後一切ヨーロッパ人移民が進入していくことを武力でもって制していくことを約束します」という条約（Treaty）を部族ごとに結ぶ。この条約によって、コロンブス以前は全土にいた先住民が0.3%の土地に押し込まれ、人口は１０分の１に減少したのである。この条約をアメリカ合衆国は建国以来ずっと結び続けてきた。条約というのは国際法上、国家

と国家しか結べない。だから先住民にとってこれは自分たちが国家であることを主張する根拠になっている。

１８００年後半からアメリカ合衆国は、北米に同じように植民地をもっていたスペイン、フランスと戦ったり、また交渉したりして、徐々に今の大きさ・形の国になっていくが、その頃はすでに先住民をほとんど殺してしまっている。移民が増えるにつれ、条約によって残った先住民を強制的に西に追いやる。その際、戦闘によってだけでなく、ヨーロッパ人が持ち込んだ伝染病（天然痘、コレラ、インフルエンザ、性病など）で殆どの先住民が死んだので、東部には居留地はあまりない。先住民は西部にしかいなくなってしまった。ジョン・ウェイン監督の西部劇「アパッチ」などで描かれる、アメリカ・インディアンが白人の幌馬車を銃で襲う場面などで、先住民＝悪人という誤ったイメージが世界中に定着した。

このように、先住民は、先祖伝来の土地を追われ、伝統的な生活をすることはおろか、生きていくのも難しい土地に押し込まれた。彼らは部族ごとに多様な文化をもっていたが、それらの歴史、音楽などが否定され、特に言語が禁止され、英語を話すことを強要されるなど、徹底した同化政策が取られた時期もあった。貧困層の率は、黒人、ヒスパニック、アジア系のグループと比較しても最も高かった。

このような状況から、アメリカ先住民はさまざまな問題をかかえるが、なかでも健康の問題は深刻である。死亡率第１位は肥満、糖尿病だが、先祖からの土地を追われ、伝統的な食生活を続けられず、政府からの援助の食料は高カロリー、高脂肪のもので、それが原因とされている。また、死亡率第３位は過剰飲酒だが、もともとアジアの血の入っている先住民はアルコールに弱い体質であるにもかかわらず、メキシコ、ヨーロッパから強い酒が入ってくるようになり、アルコール中毒患者の数が増えている。また、居留地の自治とはいいながら、第２次世界大戦には兵士として駆り出された。一般のアメリカ人帰還兵には色々な恩典があったが、先住民にはなかったので、貧しい居留地に帰るとそのギャップに苦しみ、後遺症でアル中になったり、うつ病にかかる若者も多かった。

1970年代以降の状況の好転

しかし、１９７０年代にヴェトナム戦争が泥沼化して、アメリカは建国以来はじめて自国の政策が正しいかどうか、と国民が自己点検を始める。ヒッピー運動に始まり、色々な抗議活動が活発となる。公民権運動が起こり、弱者が政府に要求を突きつけた時代である。合衆国政府は、第２次大戦後に増えてゆく移民の土地を確保するため、総人口の0.2%でしかないのに、これだけの土地をもっているということで、条約にもかかわらず、居留地を削減していく。これに怒ったインディアンが１９６９年、アルカトラズ島（マフィア

のアル・カポネなど重大犯罪者がかつて収容されていた島。当時は無人島）を占拠して政府の方針に抗議行動をおこす。これが発端となり、彼らの問題が初めて世界中に知れ渡る。アメリカの中ではこれが好意的に受け止められて、さまざまな法律が施行され、全体の状況が好転し始める。１９７５年にはニクソン大統領の”Self-determination and Education Act”（「インディアン自決・教育援助法」）が制定され、居住地の治外法権的な自治が認められ、教育援助も保障された。

学問の世界でも同じような展開が見られる。クローバー博士は、１９２０年代にイシという狩猟・採集で生活している最後のアメリカ・インディアンを発見して、それを博物館の中で生活させ、生きたまま展示した。イシはストレスと伝染病で２年後に死亡するが、これはアメリカ・インディアン研究の汚点として残っている。１９９０年には「インディアン美術・工芸法、アメリカ先住民墓地保護・返還法」が制定され、それまで美術館、博物館で展示されていた先住民の遺跡、遺骨、宝石などをインディアンに返還することが法律で決まった。現在、アメリカの博物館ではそのような展示物はない。

研究者は先住民にとっては敵だった。居留地に入ってきて、写真を撮り、彼らのプライバシーを暴露し、研究者の経済活動に利用しているということで、1920年代以降は、居留地のなかに研究者をなかなか入れないというかたくなな態度をとり始めた。その教訓から、現在の研究者の立場は、写真を撮ることはなるべくやめて、見たこと、聴いたことを話したり論文にすることはあっても、人物の写真を入れたりするプライバシーの侵害は止めようというものである。

大学でも1970年代頃からアメリカ先住民研究が盛んになり、大学でNative American Studies(アメリカ先住民研究科)という学科が設立される。インディアンについての本の99%は、ヨーロッパ人などインディアン以外の人によって書かれている。しかし１９７０年代以降、 教育を受けられる先住民が増加し、自分たちのことを勉強しようとする先住民の研究者が増えていく。自分たちは西欧的な考え方とは違い、歌や民間伝承（folklore）などで歴史を語り継いできた。その視点から、自分たち民族の文化を復活していこうという、いわゆる多文化主義の動きが中心になってきた。

<u>21世紀のアメリカ先住民の状況</u>

今年、全国インディアン協会の全国大会で、その会長（チカゾー部族の酋長）が、自分たちはアメリカ・インディアンとして大統領に何を要求するかを演説した。彼はこの演説の中で、４つの要求をしている。その中には、国家と国家（Nation to Nation）の関係をアメリカ合衆国と作っていかなければならないとか、アメリカ合衆国政府は、できるだけ多くのインディアンを採用すること、などが入っている。この最初の要求はどういうこと

なのだろうか。それは、部族が基本的には独立国家であるという主張を一番考えてくれる候補者に投票するから、そのためには、インディアン・ネイションとしての我々のところへ来て選挙運動をしなさい、という意味なのである。オバマ大統領は、1期目の選挙活動の時、かなりの部族を回り、国家対国家の関係を自分は認めると言って、国家としてできるだけ考えていくということを約束している。したがって、共和党のロムニーより、民主党のオバマが先住民のなかでは優勢と思われている。

なぜ、このように会長は強い発言ができたのだろうか。それにはアメリカ先住民の経済的な発展が考えられる。合衆国政府は１９７０年代から１９８０年代にかけて、部族の経済的な発展と自立を促すため、カジノ産業への参入を促進した。それによって多くの部族が参入し、現在、巨大な資金をもとに、大統領選挙では、カジノを経営している部族のロビー活動が活発だし、州への発言権も大きい。また、農業、産業に適さない不毛の土地に追いやられた、と思われていたその土地から貴重な鉱物資源がでることがわかり、経済的に潤っている部族もある。

しかし、ウランの問題では、ナバホ族の土地で核実験が行われ、半日車で走っても、車1台に出会うのがやっとというような広大な土地の中でも、人々が後遺症に苦しんでいたり、産業廃棄物処理を引き受けている部族も同じような深刻な健康被害の問題をかかえている、など、発展にともなう負の遺産も深刻である。

しかし、いろいろな問題を抱えながらも、全国的に存在感が増している先住民の運命が、今後より良い方向に向かえばいいと思っている。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

質問はいくつかあった。①インディアンの血を４分の１持っているのがインディアンと認められるというが、今後混血が進めば、先住民の数は減っていくのではないか、との質問に対しては、部族は一方では自治権をもっていて、血の割合を変更しているところがあり、チェロキー族では、368分の１を持っていればインディアンとみなす、としている。自分が研究している部族は、保留地に住んでいる限りインディアンだとするゆるい条件である。だから、数が減り、淋しく「滅んでいく人びと」というイメージではないと思う、との答えだった。

②「国家対国家の関係、と言っているが、内容的には、独立性の強い自治体ではないかと思うが・・・」という質問に対しては、国家として成り立つ部分と、自治区として成り立つ部分がある。犯罪に関しては、州より部族の自治の方が強い。州は関与できない。し

かし殺人などの重大犯罪に関しては、連邦政府は関与できる。州と部族の争いになった場合、連邦政府が合衆国憲法をもとに関与してくる。保留地の中は無税。州も連邦政府も税をかけられない。戸籍に関しては、部族が管理。合衆国は一括して食料を渡す。メンバーシップについては、連邦政府から独立している。このようにレベルによって自治権が変わるので、インディアン法は複雑である、というお返事だった。

③学校はどうなっているのか、との質問に対して、教育に関しては州が強い。合衆国は教育に関しては州権が強く、州単位で行われる。教育基本法に基づいて、部族の子供は州立の学校に通う。カジノで成功している部族で、自分たちで学校を作っているところもある、とのお返事だった。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

野口久美子さんは毎年何回かは現地調査のため、インディアン居留地を訪れるということで、スライドをたくさん見せて下さいました。メールでやりとりをしていた時に、電波の届きにくいところに居たので返事がおそくなった、というメールをいただいたことがあり、どんな山奥で調査をしていらっしゃるのかと、興味がありました。日本ではアメリカ・インディアンの話題はあまり出ないので、彼らと合衆国政府との関係が条約に基づくものであるなど、初めて聴く話も多く、非常に興味深い講演でした。歴史は多くの場合、勝者の視点から書かれるものであるとはいえ、私たちの一般的なアメリカ史の知識が、勝者の側、つまり白人の視点だけからのものだったことに、少なからず衝撃を受けました。

新進気鋭の研究者として、今後もますますご活躍なさることを祈りつつ、また当支部の非常に数少ないヤング・メンバーでもいらっしゃるので、支部会員として活躍していただきたいということと、今後もまたお話が聴ける機会があることを望みながら、閉会となりました。

3.　第２回例会講演要旨

「『私の中のアメリカ―@us/nippon.com』出版に際し、伝えたいメッセージ」

講師：青木怜子大学女性協会前会長　　2012年10月20日

先生をお呼びすることを提案して下さったのは、京都支部会員の野口久美子さん（青木先生は聖心女子大学で彼女の指導教官）であり、先生との連絡を一手に引き受けて下さった。心から感謝を申し上げる。せっかく前会長をお呼びするのだからと、中川支部長が大阪、神戸、奈良、福井の各支部に声をかけ、この５支部共催が実現した。出席者は、大阪支部8名、神戸支部7名、奈良支部2名、福井1名、青木先生の元ゼミ生5名を含むビジター8名を入れて、合計51名だった。

講演会の終了後は、３０分ほど青木先生と5支部との交流会をもち、5時30分から、日本料理店「濱登久」で、大阪支部５名、青木先生の元ゼミ生５名を含む２９名が出席して懇親会が持たれた。以下がその報告である。

１．講演「『私の中のアメリカ―@us/nippon.com』出版に際し、伝えたいメッセージ」の要約

<u>アメリカ研究にいたる道のり</u>

本の題の中にある 「@us/nippon.com」について。「@.com」は、パソコンをおやりになる方はご存じの、メールアドレスにつかう記号だが、私が交互に日本とアメリカにいたので、それをあらわす方法としてこれを使った。

私は1936年、１歳２か月の時、父の赴任にともなって、家族と共にアメリカ・ロスアンジェルスに渡った。３年半後の1939年に帰国して、小・中・高と日本の学校に通ったが、その間、1941年には戦争が始まり、1945年、小学校5年生の時に敗戦を迎えることになる。戦争中はアメリカ帰りということで教師から冷たくされ、屈折することもあったが、戦中・戦後ずっと良い友人に恵まれた学校生活を送った。少し前には軍国主義一色だった世の中が、連合軍の進駐とともに、急にアメリカ文化の氾濫となる。歴史の教科書を墨で黒く塗りつぶしたり、価値観が180度転換した時代を経験した。その後は、アメリカ映画を楽しみ、お気に入りの俳優に英語で手紙を書き、サイン入りのブロマイドを受け取って喜んだ。なつかしい思い出である。

大学は聖心女子大学に入り、英文学を専攻したが、かつてのアメリカへの郷愁がどこかにあったかもしれない。大学はカトリック系の学校で、学長がアメリカ人で、教授陣も多くが外国人だったので、授業は英語で行われた（日本語の通訳つきで）。こうして初めて

英語の世界に触れたが、同時に、欧米的価値観も教えられる。――１人の人間の価値の大切さ；国際的な視野をもち、多人種や多言語を許容する寛容な心を養うこと；自己を管理して自分の行動に責任をもつことの重要性など。また、強制的ではなく、自分から進んで他の人の役に立つことをする、あるいは、自分の学んだことを社会に還元する、いわゆるボランティア活動の大切さを、大学が行うさまざまな行事に参加するなかで教えられた。まだボランティアという言葉が日本の社会では聞かれたこともない時代だった。

1957年に大学を卒業するが、その翌年の1958年に、父の赴任にともない、両親と共に今度はワシントンDCに行くことになる。私は、ディケンズのように、貧困層などを扱った社会的な作家が好きで、文学より社会史のほうが向いていると思っていたので、大学院では、専攻を変え、歴史のほうに進みたいと考え、ワシントン市内のカトリック系のジョージタウン大学大学院の史学科に登録して、専攻に19世紀イギリスの対アフリカ外交史を選んだ。その時副専攻を決める必要があり、大学からは日本史を薦められたが、資料の少ないアメリカで日本史を研究することもないと思って、アメリカ史を選んだ。私は大学でアメリカ史を勉強したことは無く、知っているのは独立戦争と南北戦争くらいで、これがのちに私の専門になるとはこの時は夢にも思っていなかった。

ワシントン生活は３年半で終わり、1961年夏、父の帰任とともに帰国することになった。修士の課程を修了し、卒業試験にも合格したが、修士論文を完成させていなかったので、1人で残って完成させるか、帰ってから日本で完成して後から提出するかの、二者択一に迫られた。色々考えて、後者を選び、帰国した。帰国後は、母校とその他2，３の大学で非常勤講師として、英語、ヨーロッパ史、アメリカ史を教えた。上智大学で、非常勤講師としてアメリカ人の学生にアメリカ史を講義するようになったこともあり、アメリカ史が面白くなって、これを私のキャリアの芯としようと思うようになった。

では、アメリカの何が私を捉えたのだろうか。

<u>アメリカの歴史が生んだアメリカの特性と魅力</u>

アメリカ史はどのような要因に支えられているのだろうか。アメリカの特性はたくさんあるが、私の体験とも照らし合わせて、大きくわけて３つある。

１）広さへの挑戦（広大な空間の広がり）
２）時間的推移が生むアメリカ史の積層
３）多様性と流動性

最初にアメリカ大陸に渡って植民地を築いたのは、イギリス、スコットランド、ドイツなどからの、いわゆるWASP(White Anglo-Saxon Protestants)で、1607年にヴァージニア

に最初の組織的な植民地を形成し、次に1620年にニューイングランド植民地ができる。このようにして移民が渡ってくるようになって、最初は東の大西洋沿岸にこびりついた、狭い帯のような地域に定着する。それが13の植民地になり、本国イギリスと独立戦争を始め、1783年に休戦条約を結び、国家として誕生する。最初は、広い大陸が横にあることは全然念頭に無く、目の先にあるものを耕して、命をつなぐというものだった。自然災害やその他の艱難を乗り越えて、その年の収穫をやっと手に入れた移民たちの神に対する感謝から、感謝祭の習慣が始まった。

当時のアメリカ大陸の大きな特徴だったことは、広い土地が誰の支配も及んでいない、いわゆる「自由地」であったということである。もちろん、原住民はいたし、彼らとの対立もあるが、原住民は土地・資源を神から与えられた資源として受け入れていた。いわゆる部族間の群雄割拠がある程度はあるが、夏には移動し冬には帰ってくるという、定住地を枠とする決まりも法律も無い生活をしていたので、封建時代のヨーロッパからやってきた移民たちには、それが自由地と思われた。そこに誰のものでもない土地があるということで、その自由地を自分のものにするには、自分が働かなければならない（勤勉の精神）。広さに働きかける個人、個人の自然への挑戦。それが個人主義を生むが、しかし自分の土地を守るためにはある程度の共同体を作って防衛しなければならない。協調主義も生まれる。

移民が増えていくに従って、西漸運動が起こる。ミシシッピ川までは緑豊かな大地であるが、そこから西は広大な不毛の砂漠、開拓を阻む大自然が広がる。だからミシシッピ川はなかなか渡れなかった。しかしそれを破ったのは産業革命である。それによってもたらされたさまざまな技術によって、乾燥地帯での農業が発達した。また、畜産農家はかつては家畜のための囲いをつくることができなかったが、鉄材、はがねが作られるようになって、鉄条網を作ることが出来た。汽車が通るようになった。トラクターを使ったり、機械化が進む。何より灌漑の便がよくなる。さらに、西部では金鉱脈、銀鉱脈が発見され、大量の移民が流れこみ、いわゆるゴールドラッシュがおこる。その様にして移民の波は西海岸にまでたどりついたのである。もちろん日本人の移民のように、逆に西海岸から奥地に入ってきた人たちもいるが、大勢は東から西であった。

この広大な土地は地域的な生産性の格差を生み、経済的格差を作り出した。その１つが、南北の対立となり、南北戦争の１つの原因となる。南北戦争が起こったのは奴隷制度の問題だけではない。この広大な土地への広がりは、当然時間差を伴っておこっている。

アメリカ国家の基礎を作った人の多くはイギリス、スコットランド、ドイツ、スカンディナビア、フランス、つまり主として西ヨーロッパからの移民で、イギリス国教会の腐敗

に抗議して国を出たセパラチスト、ピューリタンなどが主であったが、19世紀半ばからは、アイルランド、ポーランド、南欧などのカトリックの貧しい国からの大量の移民が増えてくる。そして先に定住して成功したものは、後から来る移民を差別し、それが移民間の対立を作るという循環を繰り返すことになる。ケネディが大統領になる前は、アイルランドの移民は差別されていた。そして今までは、ずっと社会の底辺に置かれているのはNative Americansと黒人だったが、最近は、この人たちにも中間層が出てきているということである。このように多言語、多民族の移民が層を成して、時間差を伴い流入した結果、その多様性と流動性は国のバイタリティの源になっている一方、すべての機会は万人に平等であるという原則の下に、融合と対立、保守と革新を繰り返している。

結論としてなにが言えるだろうか。「自由地」の国アメリカは、広大なアメリカ合衆国となり、そこに多様な文化・生活基盤をもつ移民が流入し続ける。多様性は流動性を生み、その流動性が柔軟性を必要とする。この絶えず変化する社会の中で、ぶれない核心軸が必要。その１つが、自由、平等、幸福の追求をうたう「アメリカ独立宣言」の建国理念だと思う。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

青木先生は、パート1「アメリカ研究までの道のり」とパート2「アメリカの歴史が生んだアメリカの特性と魅力」を１時間半の短い時間でカバーなさり、密度の濃いお話だった。時間の制約から、質問は２つに限った。１つは、「アメリカはアフガニスタンを始め、世界に軍隊を出している。冷戦時代なら、アメリカ国民がそれを支持するのは分かるが、アメリカが経済危機だといわれている今、国民はどういう理由でこれを支持しているのだろうか?」というもので、先生のお答えは、「アメリカにも支持する人、しない人がいると思うが、政府としてはそうすることで平和が維持され、世界秩序が保たれると思っているのではないか」とのお答えだった。２つめは、「自分は化学会社の調査部で働いていて、アメリカと特許のことで交渉をするが、いつも自己主張ばかりで、柔軟性は無いが、今の先生のお話と矛盾するのではないか？」というもので、先生のお答えは、「ヨーロッパでは封建制度、君主制度などがあり、それらを通して民主主義が生まれてきているので、それを相対的なものとしてとらえる余裕があるが、アメリカには最初から自由主義、民主主義しかなかったから、それを絶対的なものと考え、対外的に主張する。法律に対する考え方も、それと同じで、絶対的なものと考えていると思う」とのことだった。2つの質問の後で、先生が、「答えにくい質問ばかりなさるわね」とおっしゃったので、皆どっと笑った。

先生のお話のなかでは、太平洋戦争をどう考えていらっしゃるのかは触れられていない

ので、アメリカ史の専門家としてどう考えていらっしゃるのかお聞きしたい人もいたのではないかと思われる。また、アメリカ先住民の問題では、コロンブス以前にはアメリカ全土に居た先住民が、現在は0.3%の土地に押し込まれ、人口はその当時から現在に至るまでの間に10分の1に減少したという事実は、先生のお話では充分説明できないように思われ、それも先生にお聞きしたかったが、いずれも時間が無く残念だった。

お話の中で、先生が学生時代から、社会に奉仕・還元するボランティアのことを自覚的にお考えになっている点が非常に印象的だった。大学女性協会では2度会長をなさり、また国際大学女性連盟（IFUW）の会長も勤められ、それ以外にも国連総会日本政府代表代理として2度も国連総会でご活躍になっている。先生の世代では本当に数少ない国際的に活動する先駆者である。今度本部で先生が「人材育成委員会」を立ち上げて、国際的に活躍できる人材を養成する計画だということであるが、ぜひ先生の貴重な国際経験を生かしていただきたいと会員一同期待している。

2. 青木先生と5支部との交流

福井支部は現在会員が5名で、会員を増やす努力もなかなか実らないが、頑張ってやっている、ということだった。大阪、神戸、奈良、京都もそれぞれ現在の活動を話したが、神戸、京都は定期的に例会をしているが、奈良、大阪は不定期で、神戸以外は動員できる会員が少なく、問題を抱えているとのことだった。

5支部とも問題にしたのは、本部から来る資料が増えていて、それが全部メールでくるので、それを全会員に配布するには手間もかかるし、紙代、郵送代がバカにならない。メールをする会員には転送して送ることが出来るが、メールをする会員は限られているので、他の会員にはどうしたらいいか困っているということだった。青木先生のお答えは、メールをする人にだけ送るようにすればいい、というものだった。支部会員の老齢化と会員数の減少はどの支部にも共通する問題なのだが、どの支部からも良い案が聞かれなくて、残念だった。

3. 懇親会

5時半から、青木先生を囲んで懇親会を持った。青木先生の元ゼミ生全員に先生について話してもらったので、先生の色々な面を知ることができ、まるで同窓会のように和やかな会であった。先生がドライブ好き、旅行好きなのは、お話からも、ご本からもよく良くわかるが、ゼミ生のお一人が、先生がドライブに行くときはスニーカーを用意しているのですぐ分かった、とおっしゃったので、みなどっと笑った。先生は冷酒がお好きということで、隣の中川支部長とさしつさされつ、美味しそうにお飲みになっていた。8時半の新幹線でお帰りになるので、8時前に皆でお礼を申し上げて、お見送りをした。

4.　第３回野外例会報告　　2012年11月15日

1．高齢者福祉総合施設「健光園あらしやま」訪問

施設は、4階建て、外観は落ち着いた和風で、特養１０ユニット、ショートステイ2ユニットの合計120人定員となっている。要介護3以上の入居者を受け入れていて、現在の入居者は119名で、職員は非常勤を含めて40名から50名。北尾施設長のお話を伺い、その後で、施設内部を見学させていただいた。

この施設の特徴はユニットケアと呼ばれる介護のあり方で、自立支援に配慮して、入居者が主役であり続けられることを目標にしている。今までの施設は集団ケアが主流であったが、ここでは10人を１つのユニットとして、それに専従のユニット・リーダーがつき、その職員が運営のかなりの部分を担当する。1ユニットごとにリビング・スペースがあり、食事・おやつもそこで取る。また、個室にはトイレがあり、ユニットごとに「青森ひば」製の浴室を整えている。入浴に関しては、「ひとり浴」を全国の施設に広げている介護アドバイザーの青山幸広氏のアドバイスを受け、「リフト浴」や「機械浴」を使わず、入居者ご本人の自立性を促すような介助をめざしているとのことである。

その他、ショートステイのためのユニットが２つあり、要介護3以上の在宅の人が2～3日から2週間程度利用することができる。また、デイサービスセンターやホームヘルプステーション、訪問看護ステーションなどの在宅サービスも設置しており、施設サービスと在宅サービスの連携のもと、住み慣れた地域・住まいで最期まで暮らし続けていける支援を目指している。1階には診療所があり、来春からは地域に往診にも出かけられるということである。

その他の設備としては、4階に、渡月橋から松尾橋まで見渡せる、地域交流スペース「あの音（ね）」があり、時々コンサートなどが開かれる。この前のコンサートでは聴衆の40％ほどは地域の人たちだったとのこと。交流スペースの左側にはカフェ「ジョイント・ほっと」があり、ここも地域の人が自由に利用できる。

施設長のお話を伺ったあと、4階、3階のユニットのリビング・スペース、「青森ひば」や信楽焼きのユニット風呂などを見学した。オープンしてから4か月ということもあるのだろうが、全体の雰囲気は清潔で明るく、入居者や職員の皆さんが礼儀正しいのが印象に残った。このような風光明媚な場所で老後を送ることが出来るのは幸せなことだと思った。参加者には老後のことを考える年齢の人が多く、質問にも熱が入っていたが、ここの入居待機者が400人以上いると聞き、現在の高齢者の置かれている状況の厳しさに改めて愕然とした。

２．東京でのシンポジウム「男女共同参画社会の形成と教育」の報告

「健光園あらしやま」を見学したあと、その近くの「花の家」で昼食をいただき、それから、10月14日に日本女子大学新泉山館で開催された2012年度シンポジウム「男女共同参画社会の形成と教育」の報告が支部長さんからあり、同会に出席された数名が感想を述べられた。

午前の基調講演者はお二人であった。「男女共同参画社会に資する学校教育・大学とは」と題して最初に講演された東京学芸大学学長村松泰子氏は、2010年4月より国立系大学の数少ない女性学長である。男性中心の同大にあって、教授時代に男女共同参画推進プロジェクトを発足させ、現在に至るまでの学内変革の取り組みを力強く話された。「教育が男女平等であれば、社会はもっと男女平等のはずでは？」「男女平等を教える、男女平等に教える」「学校はどのようにしてジェンダーを作り出しているか」を熱弁された。中でも「学校のなかのジェンダーチェックのためのマトリックス４表」はわかりやすいジェンダーチェック表でもっと全国的に普及してもいいのではと思った。

次いで、前千葉県知事堂本暁子氏が、「女性の政治参加、災害と男女共同参画」について講演された。昨年の大震災後、被災地の避難所を視察され、そこで女性や障がい者の実態、男性がリーダーの避難所の実情を見てからずっとかかわってこられた実体験をもとに、その後の活動について話された。「災害復興と男女共同参画6.11シンポジウム」「復興構想会議への女性委員の増員」等々様々な分野に活動されている様子は満80歳の年齢を全く感じさせないものである。平常時における女性の自立、社会活動への参画、連帯感を強く持つなどの意識ある行動が、災害時にも活きてくると力説された。

午後からは、「教育」と「政治参加」のシンポジウムがあった。前半は4氏が各々の視点で家庭科教育等について発表、後半は3氏が全国地方議会女性議員へのアンケート調査等について発表され、その後、質疑・意見交換があった。

中学・高校の「家庭科」の男女共修については、それなりの成果を上げていることは事実だが、家庭とはどういうものか、また、人間としてどのように生きていけばよいのか、など生きていく上での、より幅広い理念のようなものが欠如している、という指摘がされたとのことだった。敗戦によってそれまでの道徳は完全に否定されたが、それに変わる新しい道徳というか、人間の生き方の指針が作られないままに来ている日本社会の姿がそこに映し出されているということであろう。

☆　☆　☆　☆　☆

午後の部が終わり、帰りに桂川のほとりから、天竜寺の参道までを散策した。寒い日ではあったが、秋晴れの青空の下、イチョウの黄葉、もみじの紅葉が美しく、嵐山の景観の素晴らしさを堪能しながら、いろいろ考えさせられた1日だった。

5.　京都支部新年会　　2013年1月26日

まず中川慶子支部長から新年の挨拶があった。本年も年明け早々、アルジェリアで信じられないような人質事件が起き大変な犠牲者を出しています。昨年末の衆議院選挙では、女性議員数は、再び後退し３９名でした。新政権には、経済政策もさることながら、この超高齢社会において、私たちが平和で安心して暮らせるような社会の実現に力を入れてほしいと期待したいものです。今年の冬は例年になく寒いようですが、私たちの会も冬ごもりをすることなく、皆様のご協力のもと活動したいと思っています。今年もどうぞよろしくお願いします。という趣旨のお話だった。

その後、楊雪元（ヨウケツエン）さんの中国笛、オカリナの演奏とテノールの歌を聴いた。楊さんは、中国天津市出身。文化大革命の年に生まれる。盲目だったため、ひとりでも生きていけるようにと両親が、音楽の才能があった楊さんに９歳の時から中国笛を習わせた。その後、障害者を受け入れる長春大学特殊教育学院音楽科に入学、中国笛を専攻する。１９９９年に来日。ここで声楽の才能も伸ばすよう勧められ、京都市立芸術大学大学院音楽研究科修士課程声楽専攻修了。北村敏則氏に師事する。第２回中国音楽国際コンクール器楽の部最優秀賞、声楽部門第１位。日本では第１８回日本クラシック音楽コンクール声楽部門上位入賞。現在は中国、日本各地で演奏活動を行い、驚きの中国笛テクニック「三五七」、ドラマチックテノール楊雪元の世界「情熱」の２本のCDをリリースしている。

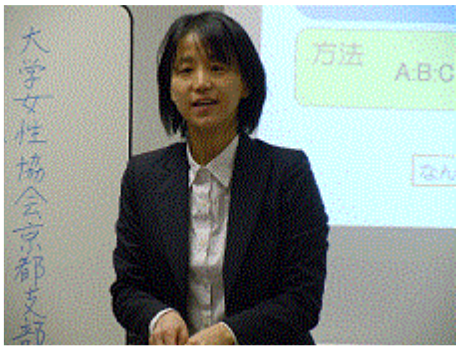
まず２種類の中国笛を使って中国の曲を演奏した。１つは手のひらにのるほどの小さいもので、その２つを自在に操りながら演奏する、その巧みさに一同圧倒された。普通のフルートより澄んだ、心に染み入る音色だった。次に、イギリス製の、二重奏ができるというオカリナで、うぐいす、きつつきなどの鳥のさえずりの入った楽しい曲を吹いたが、そ

の鮮やかな技巧には一同驚嘆した。声楽では、まずイタリア歌曲の「オーソレミオ」を歌ったが、思いがけないほど艶のある魅力的な声と豊かな声量に一同本当に感動した。日本の歌は、「北国の春」。2011,3,11の東日本大震災から２年経とうとしているのに、まだ仮設住宅に住んでいる人たちの映像をよくテレビで見るので、東北の人が故郷の春を思う気持ちを歌った、「白樺、青空、南風。こぶし咲く・・・」で始まるこの歌は昔よりずっと切実に心に響いてきた。アンコールには中国の歌「夜来香」（イエライシャン）。この中国の歌は、戦争中に山口淑子が李香蘭という名で歌っていたもので、彼女は日本のスパイだったと一時疑われたこともあり、この歌は中国では歌われないと聞いていたが、もうそういう拒否反応はなくなったのだろうか。３曲ともとても良かった。文化大革命の時のお生まれだとのことで、その時の中国の混乱のなか、色々ご苦労があったと思うが、それを乗り越え、今このように活発に両国で演奏活動をしていらっしゃるご様子に、一同盛大な拍手をお送りした。奥さんは日本人の方だと思われるが、かいがいしく演奏の手助けをしていらっしゃるご様子が印象に残った。

　そのあと食事の時間となり、伊藤洋子会員に乾杯の音頭をとっていただくことになったが、その前に彼女は楊さんの前にいらっしゃり、彼の音楽が素晴らしくて感動したことを、とてもきれいな中国語でおっしゃった。彼女は中国文学のご出身。私たちを代表して中国語で彼にお礼を言っていただけたので、さすが大学女性協会、と皆さん嬉しく思ったのではないだろうか。それぞれの健康を願って乾杯（かんぺい）したあと、食事と歓談に移った。イタリアンのお食事は美味しいと好評だった。昨年はJAUWの性格が変更になった。その後会がどのように具体的に社会とかかわって行くのかはまだ不透明であるが、今年は少し明白になることが期待される。新年会では久しぶりにご出席になった方もいらっしゃり、その方たちと旧交を温めたり、楽しい懇談の時間を持ったあと、最高気温５度というこの冬一番の寒さのなか、皆それぞれ家路についた。

6.　第4回例会講演要旨　「植物のかおりの生態学」

講師：塩尻かおり 会員（京都大学白眉センター特定助教）　2013年3月2日



京都大学大学院農学研究科博士課程終了後、日本学術振興会海外特別研究員としてカリフォルニア州立大学デービス校で研修を積み、現在は京都大学白眉（次世代研究者育成）センターの特定助教。専門は化学生態学、昆虫・植物生態学。昨年、大学女性協会の守田科学研究奨励賞を受賞され、また、昨年3月には京都大学が学内の優れた女性若手研究者に贈る「たちばな賞」を受賞された。

「小学校の国語の教科書で、『植物は花粉を虫に運んでもらうために、花を進化させてきた』ことを知り、植物のしたたかさに感心しました。博士課程で、植物は食害を受けたときに匂いを出し、食害している虫の天敵を誘引し、食害から免れるという研究を行ってからは、植物の誘導防衛反応と植物の匂いがもたらす生物間相互作用に興味をもっています。」（「自己紹介」より）

「植物の”かおり”と聞いて、思い浮かべるのは、花のかおりかもしれませんが、この講演では葉の”かおり”に注目します。この葉の”かおり”は、なんらかの被害を受けると多く出されるだけでなく、被害の種類によっても異なります。そして、この変容する”かおり”は様々な生物種に多様な影響を及ぼしています。目に見えない、また、あまり注目されていない植物の葉の”かおり”が如何に生物界にとって重要かを以下の３つの研究例をもとに紹介します。

１）害虫の天敵誘引

２）夜行性昆虫の昼夜決定要因

３）植物同士のコミュニケーション・ツール」

<u>１）自分を食べる害虫の天敵を匂いで誘引する能力</u>

植物は匂いをだしているが、それは単一の成分でできているのではない。色々な成分が複合している。植物は、自分を食う害虫の天敵を匂いで誘引して、その天敵が害虫に卵を産みつけ、害虫を餌にして食べ、害虫が死ぬことで、自分を守るという能力を持っている。どの植物にもそれを食う害虫が居る。そしてその害虫を食う天敵がいる。例えば、キャベツを食う害虫には、アオムシ（青虫、モンシロ蝶の幼虫）とコナガ(小菜蛾、1.5mmぐらいの小ささ)がいるが、アオムシの天敵はアオムシコバエ蜂で、コナガの天敵はコナガコバエ蜂。それらの天敵はそれぞれ匂いで誘引されて害虫を見つけ、それに寄生す ることで害虫を殺す。アオムシコバエ蜂は、コナガには寄生できない。このようにして、植

物は匂いを出すことで、害虫の天敵を誘引して、自己を守っている。

キャベツでは、①健全なキャベツ、②人工的に傷つけたキャベツ、③虫に食べられたキャベツ、の3種類を使って実験をすると、①の場合も匂いはでているし、②の場合は、健全株に比べて匂いの量はどっと多くなるが、天敵がやってきても、人口的に開けられた穴の周囲を回るだけであまり動きはない。③コナガが食べたキャベツの場合は、コナガコバエ蜂が寄ってくる。アオムシの時は、アオムシコナガ蜂が寄ってくる。それらの匂いを分析すると、どの害虫に食べられているかで、その天敵をおびき寄せる匂いを多く出していることが分かる。

このように、植物が害虫の寄生虫をおびきよせる能力を持っていることに注目して、植物の害虫駆除に役立てようとしている。

２）匂いは夜行性害虫の昼・夜決定の要因となる

トウモロコシにつく害虫にアワヨトウ(あわ夜盗)という虫がいる。その天敵はカリヤコマエ蜂である。アワヨトウは昼間は土の中に隠れている。カリヤコマエ蜂は昼光性。なぜ、昼光性のカリヤコマエ蜂が、夜活動するアワヨトウに寄生するのか。夜と昼とをどう区別しているのか。実験で分かったことは、①健全株は、明るくても暗くてもあまり匂いは出していない。②食べられている株も、暗いとあまり匂いは出ない。③このように夜は健全株も食べられた株もあまり匂いを出さない。しかし明るい時は、健全株と食べられた株の匂いに差がでて、匂いは食べられた株の方に多く出る。したがって、植物の夜と昼に出す匂いが、天敵の昼・夜の行動パターンに影響しているのがわかる。

３）匂いが植物間のコミュニケーションの道具になっている

今私が最も力をいれて研究しているのが、植物間のコミュニケーションの問題である。健全株と食害株を並べると、食害株の出す匂いで誘導されて、健全株が、あたかも自分も食べられているような匂いを出す。多くの植物は、食べられたら、匂いをだすだけでなく、トゲを多くしてみたり、毒物質を出してみたりして、誘導防衛反応を示す。1980年代から言われていたこの相互作用説は、信憑性が疑わしいとされていたが、2000年に日本人研究者が、被害株に防衛遺伝子が発現することを証明した論文を雑誌 Nature に発表した。

私は、アメリカの研究者などとチームを作って、アメリカのヨセミテ国立公園の東側にある、一面にセージブラッシュ（ヤマヨモギ）の潅木の群生している平原で、この植物が野外でどのようなコミュニケーションをしているかという実験をしている。2つの株を決めて、一方の株の枝を切って、隣の株を調べる。もう一対の株では、切った枝の切り口に

袋をかぶせて、匂いが出ないようにする。5月の初めにそれを行い、そのまま放置しておいて、9月にどれだけ被害を受けたか、食べられた穴の数を数える。やられた数が少ないほど、葉っぱが防衛していることがわかる。匂いが出ている方が有意に数が少なく、防衛作用が働いているという結果がでた。これでセージブラッシュではコミュニケーションが野外で行われていることが分かった。この実験を他の植物にもしている。今年の実験では、タンポポ、セイタカアワダチソウも匂いをかがせると、虫にあまりやられなくなる。

100株ほどの遺伝子を調べた結果、血縁が近いほど匂いが似ている。匂いで血縁関係を認識できるかどうか。クローン株を使って調べると、似た匂いの個体を受容すると、誘導反応が起こり、被害率が低くなることがわかった。つまり、植物は自分に似た匂いを認識できることが分かった。

４）上記の今までの基礎研究を応用の段階へ

上記１）の基礎研究は、滋賀県大津市の京都大学生態学研究センターで、指導教授の下にチームで行っているが、被害株の匂いは天敵を誘引することが分かり、その匂い成分も分かったので、それを使って天敵を誘引する製品を作るべく、実験を開始している。京都府美山町の農家のビニールハウスの中に、ベープマットのようなものに匂いをつけて、蜂蜜と一緒にぶら下げてみた。何もしないとやはりコナガは発生するが、匂いのついたベープマットをぶらさげると、全くゼロにはならなかったが、確かに有効で、コナガの発生を農薬をまかずに抑えられる事がわかった。

上記３）では、植物が色々な匂いでコミュニケーションをしていることが分かってきたので、それで何か出来ないか、現在模索中である。田んぼのあぜ道に生えている雑草を刈ると、わっーと匂いが出る。それがどういう影響を作物に与えているかを調べている。その匂いを水田に放出すると、まだはっきりとした結果はいえないが、収穫量は増えた。黒豆の畑にも同じことをすると、同じく収穫量は増えた。しかし残念なことに両方とも味は落ちる。それをどうするか、今それを考えている段階である。

結論としては、これらの実験を続けることで、生物の多様性のメカニズムを解明し、植物の匂いを使って、環境にやさしい農業技術を確立していきたいと思っている。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

葉っぱが匂いを出して自己防衛しているという塩尻さんのお話は、知らないことばかりで、皆にとって興味深いものだった。家庭菜園をやっている会員が、今まで殺虫剤で害虫を殺していたが、天敵まで殺していたのですね、と驚いていた。自然がどんなに見事に構成されているか、動物・植物がどんなに巧みに自己防衛をしているか、まだまだ私たちの知らないことばかりだと実感した。お話の中でなにより印象に残ったのは、葉っぱが害虫に食べられた穴の数を調べるという、気の遠くなるほど根気の要る、地道な仕事をなさっているということだった。実験科学者はすべてそうだが、あらゆる場合を想定して、その１つ1つを調べていく、その努力にはただ頭の下がる思いだった。塩尻さんは3児のお母さんで、下のお子さんは昨年9月にお生まれになったばかりである。大津の研究センター、美山町の農家、ヨセミテ国立公園など、広範囲な場所で実験をしていらっしゃるのを考えると、驚くほかはない。賞もたくさんお取りになり、最近も論文1本を発表なさったばかりだということで、最高の水準で研究をしていらっしゃるのは、ただただ素晴らしいの一言につきる。当日も、学校が土曜日でお休みなので、小学校一年生の長女のお嬢さんを連れていらっしゃった。お嬢さんはパソコンのパワーポイントを押すお手伝いを上手になさり、お母さんのお話も分かっていらっしゃるようだったので、将来はお母さんのような理系の研究者になっていただきたいものである。講演が終わるとこれから保育園に赤ちゃんを引き取りに行くとのことだった。どうぞ今後もくれぐれもお体に気をつけて、研究を続けていただきたいと、皆で盛大な拍手と共にお見送りした。